人と自然の共存探る

森と里と海のつながり　最新研究を紹介

京大博物館きょうから

人間社会と自然との共存のあり方を考える企画展示「森と里と海のつながり　京大フィールド研の挑戦」が2日から、左京区の京都大総合博物館で始まる。学術研究のパネル紹介のほか、生物標本など博物館の所蔵品も豊富に展示している。

京都大が全国に持つ演習林や水産実験所などが統合され、昨年4月に「フィールド科学教育研究センター」が発足したことを受けて企画された。

「海岸でいま何が起きているか」「変貌する里の風景」など、テーマごとに最新研究を紹介。森、人間が生活する「里」、海が互いに影響し合うことを指摘し、人間活動による環境汚染や破壊への警告も発している。

また、イワシクジラの骨格など生物標本のほか、ダーウィンの著したフジツボに関する古書など貴重な学術書を展示。木を切ってにおいの違いを比べる体験コーナーもある。竹内典之・同センター教授は「例えば森に近い海には魚が多く『魚付き林』という。必要な養分が適度に川を介して流れるからだろうが、実証は進んでいない。物事を分断して考える従来の科学とは違う視点を提示したい」と話している。

8月29日まで。午前9時半～午後4時半。入館料は一般400円▽大学・高校生300円▽小中学生200円。月火曜休館。関連行事として、7月17日には作家のC・W・ニコルさん、同24日には養殖漁業の傍ら植林運動を続ける畠山重篤さんらを講師にした公開対話集会が京大時計台である。問い合わせは同博物館（075・753・3272）。【野上哲】

イワシクジラも展示された会場＝左京区の京都大総合博物館で